

1 研究テーマについて

昨年度までの研究主題「実生活で生きてはたらく力を育てる国語科の学習—単元を貫く言語活動を充実させる学習の展開—」を受けて、本年度からは、「ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開—単元を貫く言語活動の中で、子どもの関わりを促す支援の工夫—」を主題として研究を進めている。これからの子どもたちには、ますますグローバル化し、予測不可能な社会の中で生きていく力が求められている。そのためには、基礎基本だけではなく、主体的に協働する力を付けることが大切である。本年度のテーマの中の「子どもの関わりを促す」という部分は、まさに主体的・協働的に学ぶために必要不可欠である。授業の様々な場面で子どもたちが関わり合う場面を設定していくと思うが、必然性があり、子どもたちが「聞いてよかった。話してよかった。意見を聞いて話し合うことで新しいことに気付けた。」と感じられるようなプラスの体験をたくさんさせていってほしい。

2. 研修Ⅰ

「ヒロシマのうた」の実践では、ミニポスターを作るという単元を貫く言語活動を設定することで、児童の意欲向上が図れ、必然性のある多読ができていた。

また、「人物を考えて書こう」の実践では、書くことに関わる学年間・領域間の関わり、縦と横のつながりがしっかりと研究されており、具体的で分かりやすく、各校に持ち帰って実践できるものになっていた。

3. 研修Ⅱ

「サラダでげんき」の実践は、生活にかえていくことを意識した実践であった。ここで学んだことが実生活の中のどういったことにつながるかということが大変明確で良かった。

また、「問題を解決するために話し合おう」の実践では、話し合いが苦手な子どもの背景にあるものを分析し、「〇〇な子には、△△」というふうにとくさんの具体的な手立てが考えられていた。話し合いが苦手な子への指導については、どの学校でも課題になっている。各校でさまざまな手立てを考え、実践を共有化してほしい。

4. さいごに

単元を貫く言語活動を設定する際には、子どもに付けたい力は何なのかということを大切にしてほしい。それが単元構成のおおもとになる。児童の実態も合わせて考え、付けたい力にぴったり合う言語活動を見つけ、その指導の終末の子どもの姿を明確にイメージしてほしい。子どもたちが、その単元で「何をどのように学び、何ができるようになるのか。」そのために、「どのように指導するのか」を学習のスタート時にしっかりと考えていくことが大切である。

1 単位時間それぞれの言語活動についても、その活動を通して、本時付けたい力は何なのかを明確にしてほしい。言語活動は、付けたい力を身に付けるためのツールである。言語活動自体が目的にならないように注意しなければならない。また、単元で付けた力が、生活の中で使える、もう一度やってみたいと思えるものにしてほしい。系統性も踏まえた上で、本単元でどんな力を付けるのかをしっかりと考え、シンプルでいいので確実な力を付けてほしいと願う。